

備陽史探訪の会十二月例会

～～山城歩きパートⅢ～～

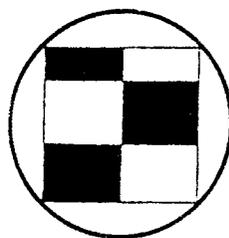
「戦国和智氏の遺跡を訪ねて」資料

平成2年12月2日実施

(浄土寺文書五六号)



吉舎南天山城主
和智豊廣



和智氏家紋

— 目次 —

- 「和智氏と吉舎町」田口義之……………P 5
- 「南天山城」藤村耕市（吉舎町史上巻）……………P 4
- 「善逝寺」藤村耕市（同上）……………P 6
- 「大慈寺」藤村耕市（同上）… ……P 8
- 「三玉大塚」桑原隆博（吉舎町史上巻）……………P 15

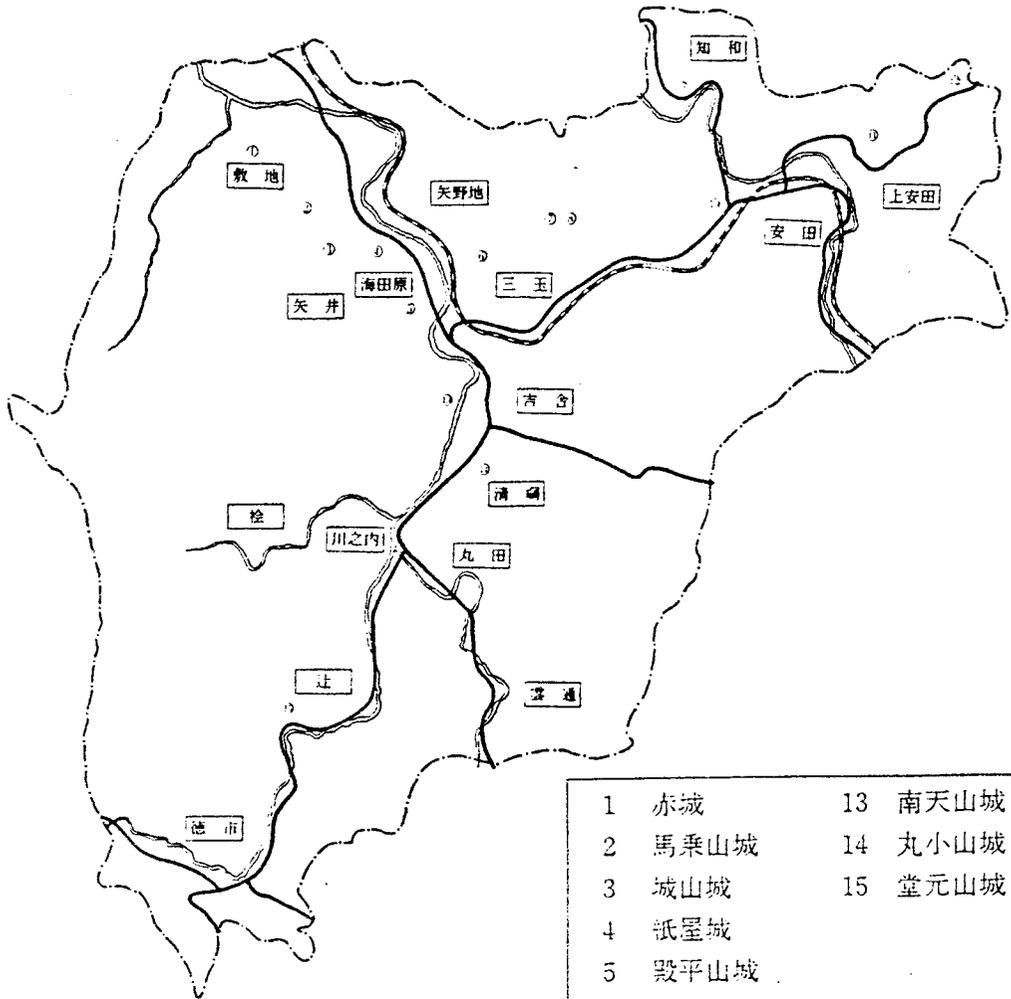
— スケジュール —

- 8：30 福山発—10：00 吉舎町歴史民俗資料館—11：00 大慈寺—
- 12：00 善逝寺（昼食）…13：30 南天山城—15：00 三玉大塚—
- 15：30 吉舎発—17：00 福山着解散

備陽史探訪の会

〒福山市多治米町5-19-8

☎(0849)53-6157



- | | | | |
|----|-------|----|------|
| 1 | 赤城 | 13 | 南天山城 |
| 2 | 馬乗山城 | 14 | 丸小山城 |
| 3 | 城山城 | 15 | 堂元山城 |
| 4 | 紙屋城 | | |
| 5 | 毀平山城 | | |
| 6 | 平松城 | | |
| 7 | 陣山城 | | |
| 8 | 登美士山城 | | |
| 9 | 池尻城 | | |
| 10 | 奥尾山城 | | |
| 11 | 安田城 | | |
| 12 | 古屋城 | | |

吉舎町の山城

和智氏と吉舎町

田口義之

戦国時代、吉舎の南天山城に居城した和智氏は、鎌倉時代の始め、備後国三谷郡（現三谷市東部、双三郡吉舎町・三良坂町）の地頭として関東より入国した藤姓広沢氏の一族で、その先祖は平将門の乱で有名な藤原秀郷です。

秀郷の子孫は下野の小山氏、足利氏（藤姓）が有名ですが、その一族で相模国波多野荘（現神奈川県秦野市）に土着した者は波多野氏を称し、さらにその一派が武蔵国広沢に移り広沢氏を称しました。この広沢氏が和智氏の惣領家にあたります。

「芸藩通志」等によりますと、源平の内乱にあたり、広沢与三実方は備前国藤戸の合戦で戦功を立て、源頼朝から備後国三谷郡十二郷の地頭職を与えられたと伝え、これが広沢一族が備後に移住してくる契機になったと言われています。

三谷郡の地頭となった広沢氏は、自身は関東の本拠地において、庶子を備後に派遣して所領を支配しようとしていました。すなわち、広沢実方の孫実村の長男実綱は三谷郡江田荘（三谷市向江田町、三若町一帯）に土着して江田氏となり、同じく次男の実成は同郡和知荘（三谷市和知町）に土着して和智氏を称したのです。

和智氏は初め名字の地和知荘に本拠を置いていましたが、南北朝時代、惣領家の跡をうけて現在の吉舎町一帯に勢力を持つようになる、本拠を吉舎に移し山城を築きました。これが今回訪ねる南天山城です。

南天山城は南から北に派生した尾根を空掘で断ち、北側を順次削平して城郭としたもので、山頂本丸には土塁、西側山腹には大手門の跡が残り、備北では標準的な山城の一つです。

この南天山城の城下町として発達したのが現在の吉舎の町です。吉舎の市街地には古市、

七日市、四日市などの地名が残っていますが、これはかつての市場の名残で、和智氏は城下に「市」を立て、領主経済の柱にしようとしたのです。

和智氏以外にも有力豪族の城下には、初期城下町としての市場地名が多く見られ、地域経済の拠点として山城を観察するのも面白いと思います

和智氏は室町時代、備後守護山名氏に従い、戦国時代には大内、尼子、毛利争覇の中、最後には毛利氏に属し長州萩に移りますが、二百年に及ぶ治世の間、信仰の面でも多くの見るべきものを残しています。

南天山城西北麓の善逝寺は初代城主の和智資実が創建した和智氏の氏寺の一つですが、本尊の釈迦如来座像は、胎内銘によりますと、応安二年和智師実が寄進し、宝徳三年（一四五二）京都で修理されたもので「県重文」に指定されています。

又、南天山城から吉舎の町を隔てて東方の山中にある大慈寺は、応永二八年（一四二二）四代城主氏実が仏通寺愚中周及の高弟宗綱恵統を開山に請じて創建した禅寺で、かつては広大な山内を誇り、仏通寺派がこの地方に広まるきっかけとなった寺院で、宗綱和尚語録、和智氏実肖像を初め多くの文化財を伝えています。

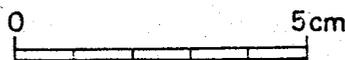
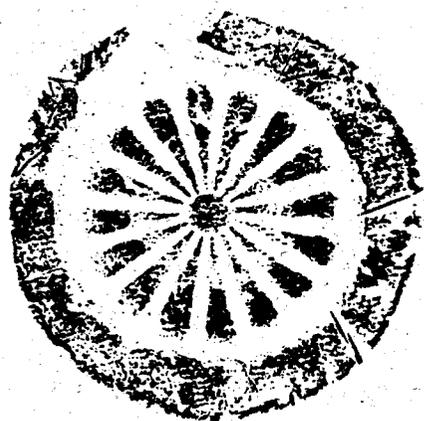
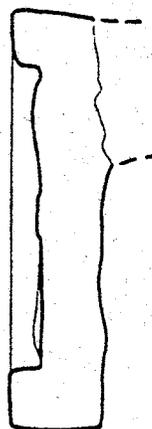
その他、和智氏歴代は造寺、造仏に熱心で、「芸藩通志」によりますと、南天山初代資実が善逝寺を創建したのを始め、三代実勝は浄土寺（吉舎町清綱）を、四代氏実は前述のように大慈寺を、六代豊広は最広寺（同町敷地）を、九代誠春は永樹寺（同町丸田）をそれぞれ建立しており、和智一族の信仰心の厚さを物語っています。

もちろん、和智氏の造寺・造仏は単純に信仰心のみに基づくものではなく、領民の教化と、併せてその権威を示す目的もあった訳で、備後の他の豪族達の信仰と比較すれば面白い研究が出来ると思います。

南天山城（吉舎）

和智氏歴代が本拠とした山城。備南からの街道が宇賀峠を下ったところの前方に、それを制するように立地している。南から北に延びる山の尾根を利用した南天山城は、北側麓は馬洗川が天然の堀をなし、南側麓は狭い桜谷となっていて、谷を隔てた西に初代資実の建立した善逝寺がある。馬洗川については、初め丸田から吉舎良神社の前を通じて吉舎甲成へと現在より東方をまっすぐ北へ流れていたのを、南天山城の堀として利用するため、和智氏が流路を変更したという伝説がある。県北を代表する山城の一つである。

山頂部から本丸・二の丸・三の丸が並び、それから少し下ったところに桜谷へ出る大手門があり、その北に尾根に沿って数多くの平地からなる郭（曲輪）が連なっていて軍勢の集結場ともなっている。本丸の南側は尾根を深い堀切りで横断して、背後からの攻撃を断っている。



南天山城出土軒丸瓦（吉舎町教育委員会蔵）

城跡から軒丸瓦と軒平瓦が出土しているが、軒丸瓦の直径が七センチという大きさから考えて、実用的な建物でなく、仏堂のような建物が想定され、三玉宝寿寺の木造延命地藏坐像は、もと南天山城内に安置してあったものとあるので（「常和寺国郡志書上帳」）、その地藏を安置していた仏堂であった可能性もある。また、懸仏とみられる仏像（一一七ページに写真）も出土し、第二次大戦中に山頂部が食糧増産のため開墾されたとき、礎石が多数発見されたという。

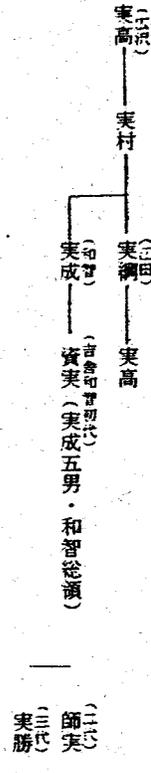
また、鉄滓や漁労用の網に使う土鍾も出土しているが、これはこの城が単なる合戦に備えて臨時に造られた城ではなく、和智氏の本城として常に兵士が詰めていたことを示すものであろう。

なお、南天山と北の尾崎山を区分する堀切りは江戸時代後半に開削されたものである。

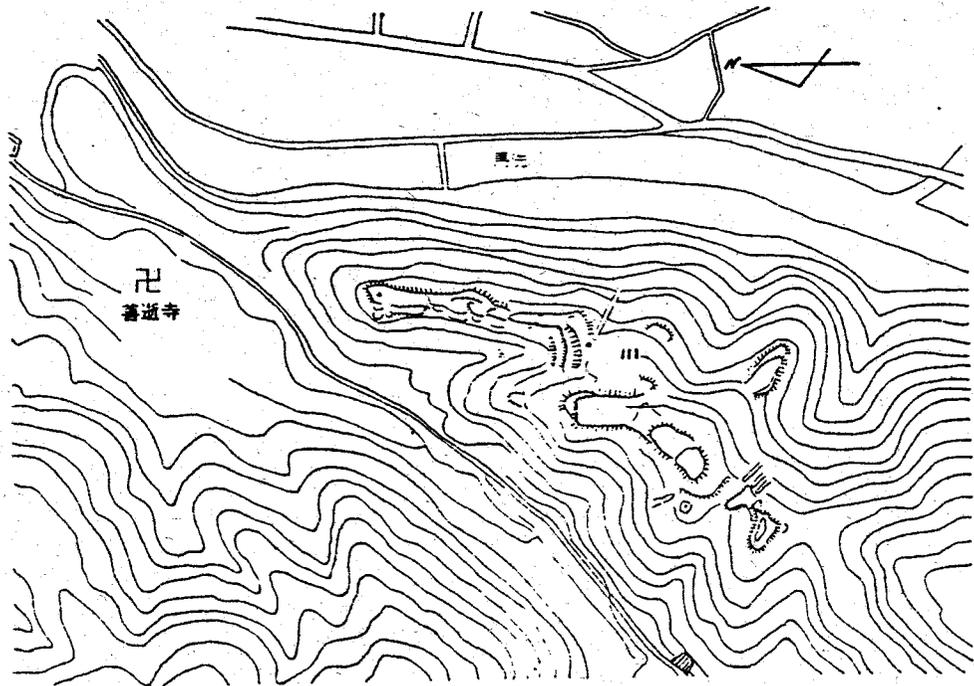
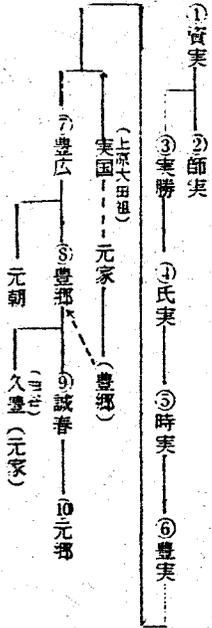
広沢氏系図『統群書類従』第六輯下「松田氏系図」による



和智氏系図Ⅰ



和智氏系図Ⅱ



南天山城

善^{ぜん}逝^{せい}寺 山号正覚山 臨濟宗仏通寺派 吉舎字桜谷

本尊 釈迦如来

建物 本堂 鐘楼 納骨堂 幽翠軒（門徒会館） 客殿

境内 六五二坪

由緒 『吉舎村国郡志』は、開山を海翁和尚（一四六六）とし、前筑州大守春谷智栄大居士（和智五代時実）

を中興の檀那とし、また、『双三郡誌』は、享徳元年（一四五二）の創建としているが、昭和三九年に発見された本尊釈迦如来の胎内銘によると、それよりも以前の応安二年（一三六九）七月に和智二代師実が一善逝

寺本尊釈迦三尊」を寄進しているので、応安二年以前に善逝寺が創建されていたことは明らかである。創建当初の宗派は不明だが、天台宗か真言宗であったとみられる。善逝寺に「当山本願檀那善逝寺殿前信州大守大同眞源大居士」と書かれている和智初代資実の位牌があることや、同寺と狭い谷をへだてた反対側の山に南天山城を築城したのが資実であることなどから、当寺の創建は資実で、その時期は、一四世紀の半ばから後半にかけてのころとみられ、その後、和智時実のとき仏通寺宗綱（正法院）派に転じ海翁和尚が入ったものであろう。『吉舎村国郡志』に「海翁和尚は大慈寺開山宗綱和尚の法脈に御座候」とある。

三谷郡三三カ所のうち第二番札所であった。

よしや誰行 寺高きとばみちも 紛れがたなき鐘ひびくなり



善逝寺（吉舎）

『吉舎村国郡志』の吉舎八勝の一つに一善逝寺正覚山桜一がある。

忘れしな またこん春も此山の あかぬ眺めの花にくらさん

文化財

◎本尊 木造釈迦如来坐像（像高四三センチ、寄木造り） 県重要文化財（昭和四〇年四月三〇日指定）。胎内銘によると、応安二年和智師実が寄進し、その後宝徳三年（一四五二）京都の法眼院芸で修理したとある（口絵、資料編参照）。

◎第七世東暉周易和尚無縫塔（石造、高さ一・一二メートル、天文九年在銘）。同和尚は永禄六年の遷化であるが、その以前の天文九年（一五四〇）の逆修つまり

生前に仏事を執行して冥福を祈ったものである。当

時のこの地方の無縫塔の形式を知るうえで貴重で、

吉舎町文化財（昭和五二年一月八日指定）。

◎石造五輪塔（伝和智資実墓）

◎寛文六年（一六六六）の刻銘を持つ鐘があったが、

太平洋戦争中に供出した。

その他

◎残党ガ窪とかくれ迫 残党ガ窪は、善逝寺の境内に接して、かくれ迫は、寺の裏山頂上付近にあるいずれも窪地で、伝説によると、永禄二年（一五六九）和智誠春兄弟が敵島で毛利氏に殺されたとき、吉田から毛利勢が南天山城接收に押し寄せた。城を守っていた二八人の武士たちは城を明け渡したのち、残党ガ窪で切腹して主君のあとを追ったという。ここに多くの五輪塔の墓石があったが、現在は無縁墓地へ移されている。また、かくれ迫は、このとき武士たちがかくれひそんだところと伝える。

寺の裏山に、明治一一年につくった、四国八八カ所を模した八八体の石仏があり、大師の命日の一二月には参拝の信徒でにぎわう。享保一四年在銘の六地藏、享保七年在銘の三界万霊塔がある。



周易和尚無縫塔

大慈寺 山号広沢山 臨濟宗仏通寺派 吉舎字天下高山(通称白根)

本尊 観世音菩薩

建物 本堂 円通閣(仏殿) 鐘楼 乳地藏堂 客殿

境内 四九三坪

由緒 応永二八年(一四二二)、和智第四代氏実(一四三六)の創建。開基は宗綱恵(慧)統和尚(一四三九)。宗綱は美作国の人で、仏通寺(三原市)や天寧寺を創建した愚中周及の高弟で、仏通寺五院のうち正法院を開いた人物。彼が大慈寺を開くとこの地方の多くの寺院が仏通寺派に属し、宗綱派(大慈寺派、正法院派とも)とよばれた。周及没後の応永三〇年、仏通寺や天寧寺のことは、四人の高僧が協議して運営することになっているが(「仏通寺文書」11)、四人の高僧の中に宗綱の名前もみられ、その地位がうかがわれる。大慈寺に「宗綱語録」「宗綱恵統遺偈」が残る(資料編参照)。川尻(甲山)の廃万年寺も宗綱の開基。

「大慈寺殿前信州太守悦岩宗和大禪定門・永享八年辰七月十三日・

和智信濃守」という和智氏実の位牌が、また、「前土州大守祝岩常得大居士神儀 海田原土佐守勝秀文」

(表)、「永禄二年己未八月五日 捨田寄進有」(裏)とある和智一族の海田原勝秀の位牌がある。

永禄三年(一五六〇)、和智誠春は父豊郷の菩提を祈って一手作分之内 土居之前五斗田一を大慈寺へ寄



大慈寺(吉舎)

進じ、同二年には海田原勝秀は自分の菩提のために、「海田原之内 馬場之下中之面一反」を同寺へ寄進している（寄進状写）。

三谷郡三三カ所のうち第一番の札所であった。

広沢の山は名に負う恵にて 開ける寺もはちすとや見む

『吉舎村国郡志』の吉舎八勝の一つに「大慈寺広沢山月」がある。

秋の夜のそらにこころもすみ渡る 月のひかりも広沢の池

文政二年（一八一九）に広島藩は各村々からその村の歴史・地誌をまとめた「国郡志書出帳」を提出させているが、大慈寺は吉舎村のそれとは別に提出している。つきはその控えの全文。

大慈寺「国郡志御用書出帳」控

豊田郡仏通寺正法院末 三谿郡吉舎村広沢山大慈寺

一、開山宗綱大和尚 作州之人仏通寺開山愚和尚之高弟 応永二十八年之頃開闢 永享二年末臘月二十七日示滅

一、開基大旦那 和智信濃守氏実公 永享八年七月十三日逝去

一、仏殿 和智筑前守時実 永享十一年建立ニ而其後兵火ニ焼失 只今之殿宇三間半四面

（付紙）

只今之殿宇者永祿十二年和智元郷殿再三之建立也

本尊観世音 備後西国十四番詠歌ニ

蓮さく宝の池も色も香も 妙なる法の心なるらむ

（付紙）

梶井御門跡御筆

一、方丈

桁七間半梁六間半 開山塔兼用

(付紙)

大慈寺と申方丈ニ額一枚有之候 臥雲申印有之候へ共 姓名并ニ人物者相分不申候

一、僧堂

本尊文殊大士斗存在 堂宇者破壊仕候

一、庫裡

只今者破壊仕候

一、鎮守

広沢八幡宮一社 本寺之正面

一、弁財天社

本池之中央

一、地藏堂一宇

本寺之正面 (後筆) 只今仮ニ御弁堂と申候へとも由来相分不申候

一、開山卵塔

本寺之北

一、大旦那石塔

本寺之前

一、蓮華池

本仏殿之前

一、金紙金泥心経菅丞相筆

一軸

一、同 心明経弘法大師筆

一軸

右二軸和智筑前守時実公寄付旧記有之

一、三十三身観音

四幅 兆殿司と申伝候

雲州仁多郡阿井郷 法名月溪良運寄付応永三十一年極月二十日開眼之法語 開山語録中

ニ相見へ申候

一、渡唐天神雪舟筆

一幅

一、大旦那悦岩宗和大禪定門之像

一幅

一、香炉

一ヶ テガラ仙人之作と申伝候

一、開山遺偈

一幅

一、同硯

一面

一、同筆

二本

一、袈裟

一衣

一、衣

一領

一、茶之湯茶碗

大小三ヶ并ナツメ茶セン

右開山所持ニ御座候

一、開山語録

二卷 但写本 仏殿本尊開眼大旦那火忌果之法語六ヶ条禁制長語故記ノ不申候

一、大罽

一口

(付紙)

当寺四方山林和智公寄付之御書御座候

往古者末寺等も数ヶ寺御座候処 或ハ破壊或者改派仕 只今ハ三玉村玉泉寺而已ニ御座候

一、世羅郡川尻村万年寺も当寺開山之創建ニ御座候処 只今ハ旧跡而已ニ御座候

一、田方六丁余其外祠堂田数丁三次世羅三谿之内ニ而拾ヶ村ニヒ仰付候 慶長七年中寺領被没収 只今ハ寺中屋敷迄も御高付

ニ御座候

一、永禄十二年ハ住持并役僧大慈派下ヶ一ヶ年代り輪番に勤候旧記御座候 慶長年中ハ例格断絶独住ニ相成或無住ニ而及破壊

宝永三年蒙世羅三谿甲奴三部勅化之御免許修覆相調候旧帳面御座候

右之通荒々如此ニ御座候以上

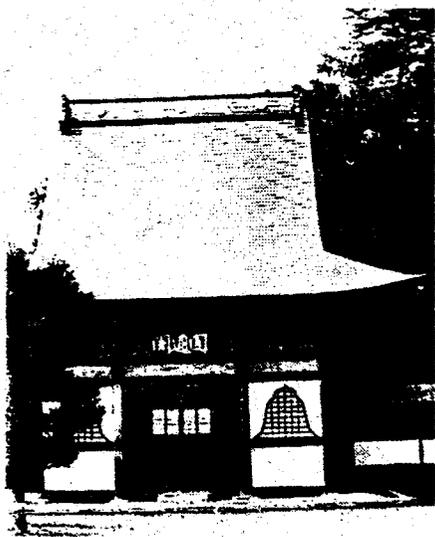
文政二年卯四月

世羅三谿郡 御役所

大慈寺

観音堂円通閣(仏殿)について

永享十一年(一四三九)和智時実が建立し、その後永禄十二年(一五六九)に和智元郷が再建したもので、後世葺きを互葺きにするなど一部改造されているが、室町時代末期の禅宗様建築として重要なものである。吉舎町重要文化財(昭和五十六年三月二十七日指定)。観音堂の合天井の百数十枚の彩色画は、天保一三年(一八四二)伊予国岩城島大観音堂有手奈の作(棟札)。



円通閣

(永禄12年<1569>和智元郷再建)

代五貫文□室□禪師

米六俵 宮西宗安之内方

代参貫文 尾崎一

並

此外

門中出銭拾三貫四百文
寺領分浮役六貫五百文

棟上之御料成莫大

文化財 ◎紙本墨書大般若経二五卷 県重要文化財(昭和二六年四月三日指定)。

この般若経は、保延四年(一一三八)播磨国揖保東郡の在地豪族で播磨国衙の在庁官人(国府へ勤めている役人)である桑原貞助の発願により、同州書写山円教寺など十数カ寺以上の寺から僧侶を動員して、この年の一月二三日の一日間で書き写されたいわゆる一日経(頓写経とも)である(奥書・資料編参照、ただし、一部は同年三月六日の写経)。一日経は、善行によって仏の加護を得ようとして行われた事業の一つである。この「播磨国在庁官人桑原貞助一日頓写大般若経」は、現在京都博物館所蔵五巻など西日本で五三巻の所在がわかっているが、その半数が大慈寺に所蔵されている。追奥書に、

奉施入吉舎村八幡宮 明応二年癸丑九月二十九日 願主守近善秀禪門

とあり、この大般若経は和泉国常楽寺を経て明応二年守近善秀が吉舎村八幡宮へ施入したものである。なお清綱にあった庵常和寺の「国郡志」にも、「三玉守近入道善秀」が延徳二年(一四九〇)に寄進した大般若経を所蔵していると記している(同寺遺物にその一卷が現存している)ことから、守近善秀は三玉の豪族であったと考えられる。いずれにせよ、この大般若経は、常楽寺を経て守近善秀が吉舎村八幡宮へ施入したものが何かの事情で大慈寺や常和寺へ移り、さらに後年一部が吉舎から



外部へ分散したものとみられている。なお、吉舎村八幡宮については後証を待ちたい。

◎絹本着色絵像観音三三身像（四幅） 吉舎町重要文化財

（昭和三九年三月三〇日指定）。作者は不明であるが室町時代の作。応永三十一年（一四二四）一月二〇日出雲国仁多郡阿井郷（島根県 仁多町）の月溪良運が大慈寺へ寄進したものの（宗綱語録）。

◎大慈寺開山遺品 吉舎町重要文化財（昭和三九年三月三〇日指定）。「宗綱遺偈」のほか、鉢盂一揃・衣一・袈裟

一・布行一・纏一・べっ子一・筆大小各一・硯一・香炉

一・湯呑二の宗綱遺愛の品。いずれも永享十一年以前の

作品。

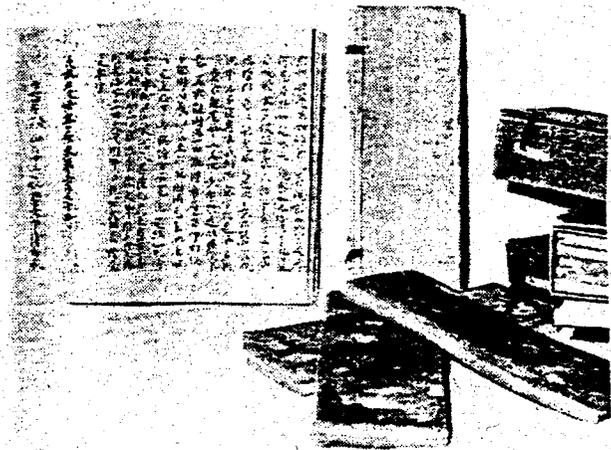
◎紙本和智氏実絵像 一幅。吉舎町重要文化財（昭和三九年三月三〇日指定）。大慈寺を創建した和智四代氏実の肖像画（口絵）。

◎石造無縫塔（大慈寺開山宗綱墓） 吉舎町重要文化財（昭和三九年三月三〇日指定）。宗綱は永享十一年の

遷化で、同時代の形式をよく残している。

◎石造五輪塔（和智氏実墓）

その他 ◎乳地蔵は二一代蒙峰和尚が四国の札所から勧請したもので、妊産婦の参詣者が多くお礼参りには布で作ったお乳二つを供える慣例がある。



紙本墨書大般若経（大慈寺蔵）

保延4年（1138）撰津国での一日経（県重文）

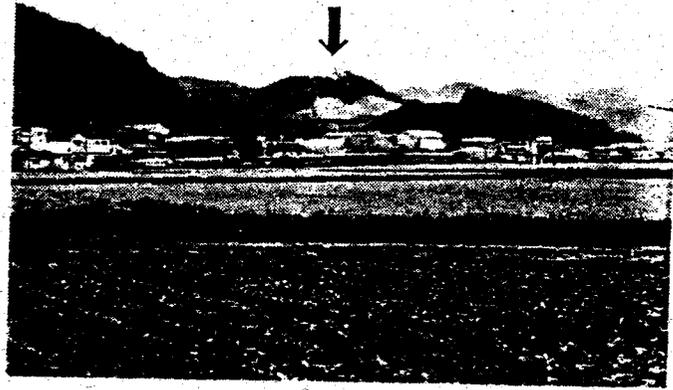
◎境内の六地藏は宝暦年間奉納のもの。同じく紅梅は推定樹齡三五〇年の老木。

◎広沢池のそばに「お弁堂」とよぶ地藏堂がある。伝説に昔和智誠春の時代に本堂を再建したとき、棟木は長さ六間半（一二丈）一抱えもある大木で、境内まではどうにか運んだものの上へあげることができなかった。そのころ大慈寺は女人禁制の寺であったが、日ごろ寺の走り使いをしていた信心深いお弁という女が美しい声で木遣節を歌い「よいしやあーと声を掛けたところ、大木はするりと動き、無事本堂を建てることができた。そのお弁さんの徳をたたえてこの石地藏が造られ、お堂も建てられたという。

三玉大塚

三玉大塚古墳（三玉第一号古墳）

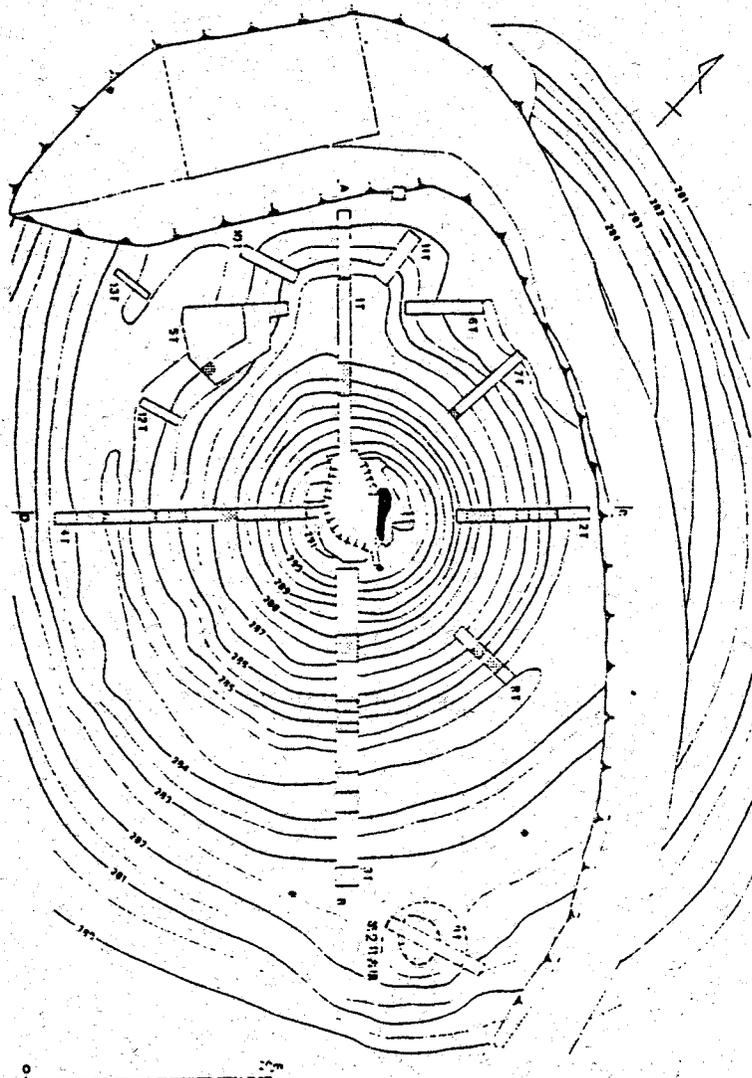
この古墳は馬洗川に向かって突出した丘陵の頂部に位置し、ここからは吉舎市街地・清綱・三玉・海田原の平地が一望できる。古墳は、帆立貝形古墳といわれる円丘部に方形の壇が付設された形をし



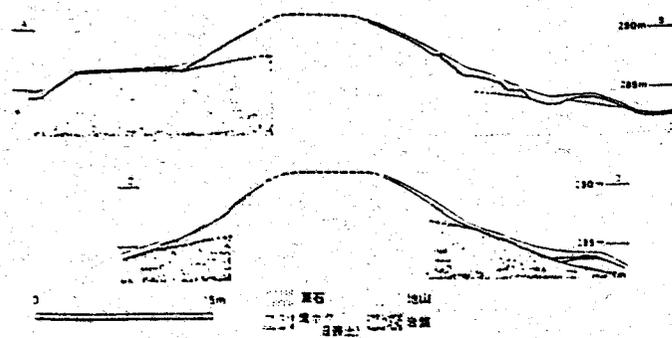
三玉大塚古墳遠望（前方中央山頂）

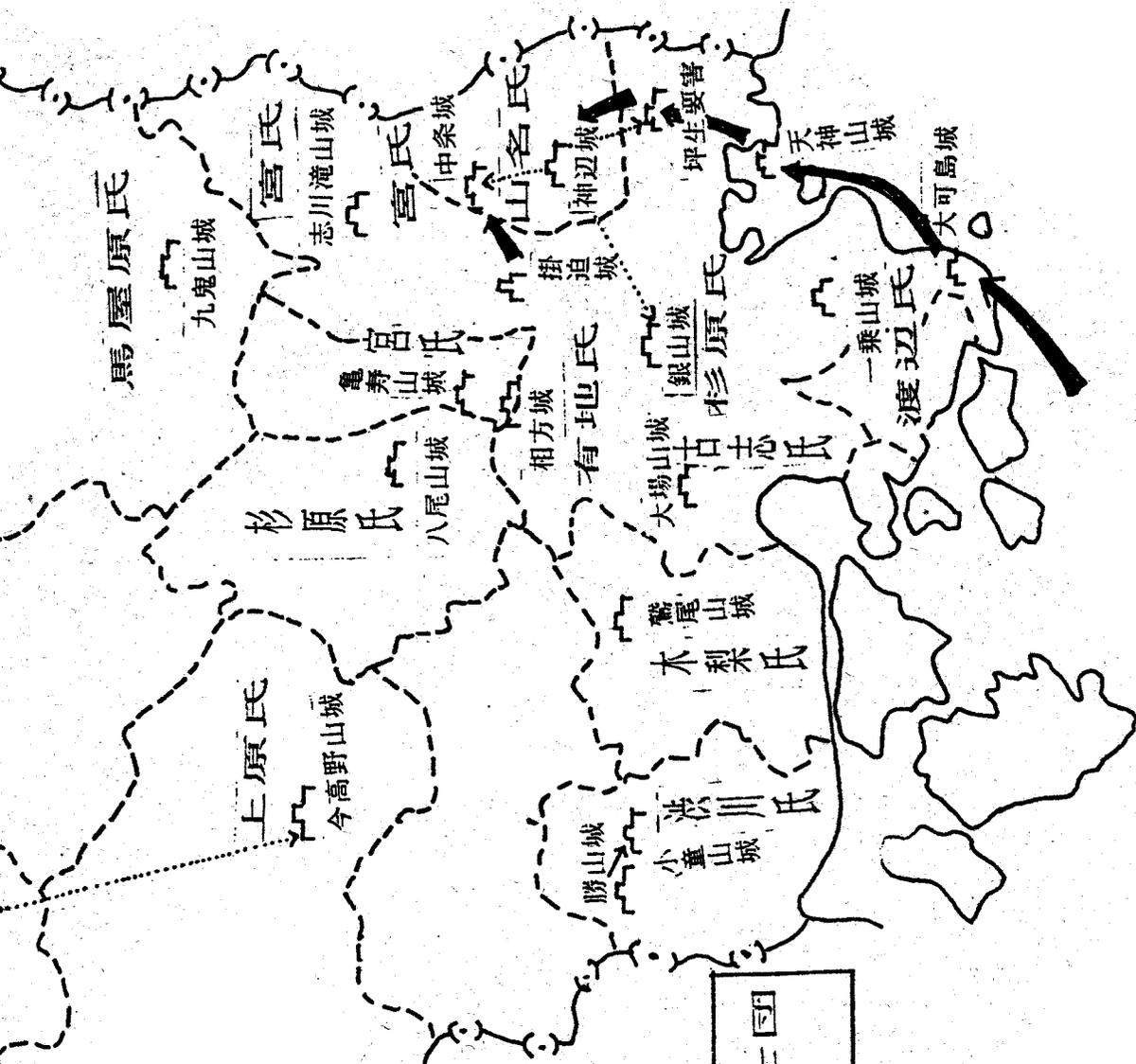
ており、全長四一、一、円丘部の径三三・三、同高さ八、二次盆地でも最大級の規模である。さらにその周囲には高さ一・二、幅七・六の外堤を設けて周堀を形成している。このような形をもつ古墳は、県内では三玉大塚が唯一である。この外堤を含めた全長は、一部をテレビ中継塔により破壊されているため正確にはわからないが、七〇余と考えられる。この古墳は、明治三六年（一九〇三）地元の人々によって墳丘の中心部（埋葬施設）が掘られ、変形文鏡一、珠文鏡一、筒形銅器一、碧玉製管玉一、滑石製白玉三五三、有孔円板一、鉄斧三、鉋一〇、鉄刀五、短甲一、兜一、鬘一、砥石三、矛四、鉄鍬多数などの遺物が出土して、その多種多量さに全国的にも注目された。現在そのほとんどは、東京国立博物館に所蔵されている。さらに昭和五年（一九八〇）から同五七年に県史跡指定にとりなう環境整備の一環として調査が行われた。その結果、墳丘は半分くらいまで地山を削り出して墳形をつくり、その上に盛り土を行っている（口絵参照）。そして墳丘斜面には河原石を使って葺石を三段にめぐらし、各段には平坦面があるが、二段目の平坦面には円筒形埴輪が立てめぐらされてきたようである。そしてこの二段面と同じ高さの方形の壇には円筒形埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・馬・家・蓋）が立てられており、ここが祭壇としての機能をもっていたものと考えられる。埋葬部は明治三六年の発掘によりほとんど壊されていたが、竪穴式石室であることが明らかとなった。当時の記録などから、石室は長さ三・六、幅一・二と推定され一基のみであったと考えられる。

三五大塚古墳墳丘測量図



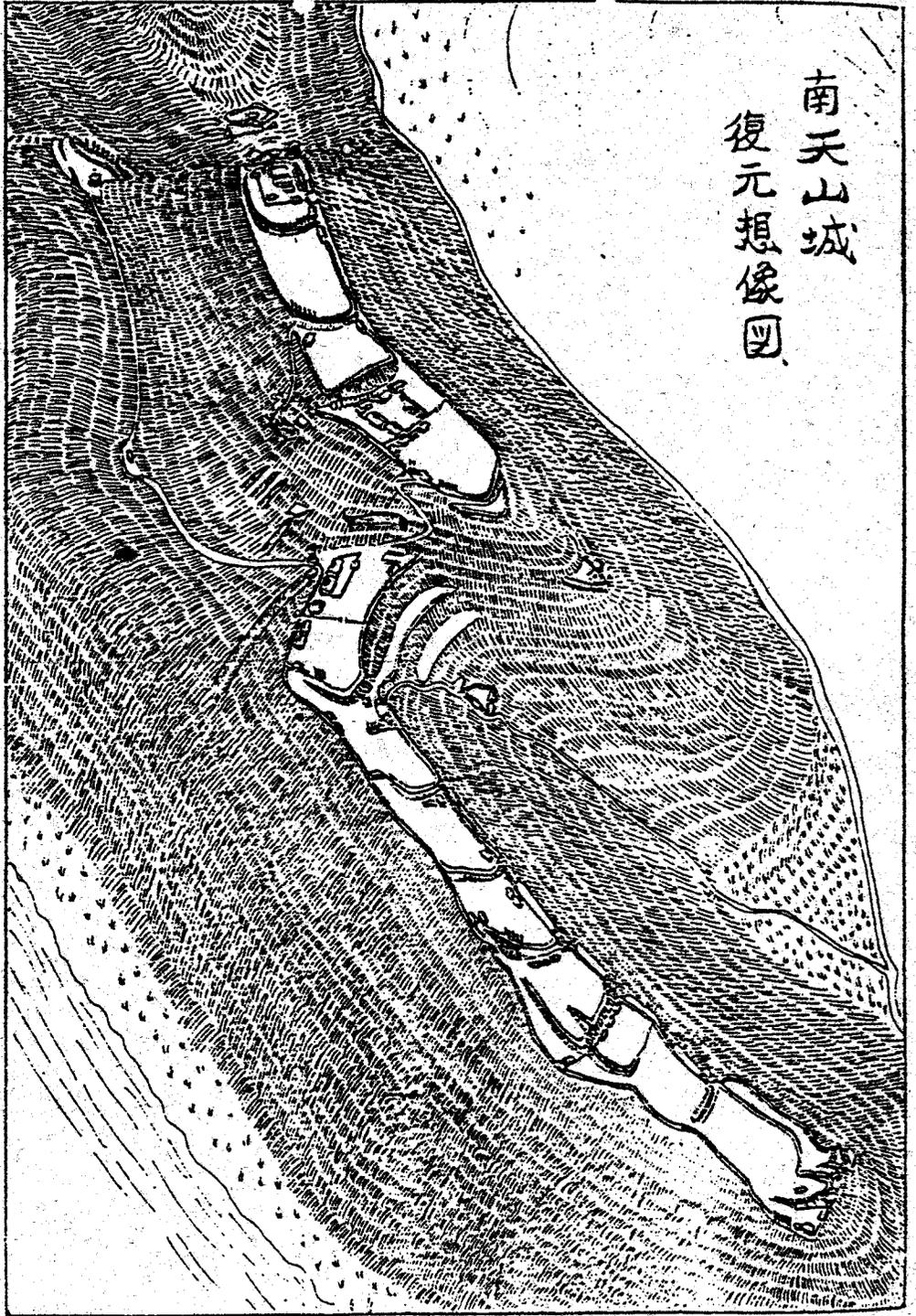
た、勾玉五、滑石製白玉四、ガラス小玉一七、有孔円板一、鉄鍬などの鉄器片が数点出土した。これらも前述の遺物とともに石室に副葬されていたものであろう。さらに周堀内からは古式の須恵器も出土している。





備後中世の山城と武士団
(田口義之作成)

南天山城
復元想像図



南天山城復元想像図（田辺俊画）